杜家立成雑書要略一巻……字の練習

宮城・多賀城南門跡付近

地方役人か？　漢文写した木簡

漢文の手紙の模範文例集の一節を記した木簡＝宮城県文化財保護課提供

宮城県文化財保護課は二十五日、同県多賀城市の市川橋遺跡から、中国で作られた漢文の手紙の模範文例集「杜家立（とかりっせい）成雑書要略」の一節を記した奈良時代の木簡が出土した、と発表した。この文例集は当時の都の貴族や高級役人が漢文、書の練習の手本に使ったものとされており、下級役人が使った木簡に記され、都以外から見つかった例はないという。同課は「文例集が、都から離れた身分の低い役人にも普及していたことを物語る貴重な史料」としている。

木簡は、長さ三十六㌢、幅三・六㌢、厚さ㍉の短冊型のヒノキ製。陸奥国府だった多賀城の南門跡近くの水田の地中約四㍍から、昨年十一月に見つかった。　片面に「杜家立成雑書要略一巻雪寒呼[illegible]故酒飲書□」、もう片面には「杜家立成雑書要□□書口□□口」（□は判読不可能な文字）と記されてあった。

同課は、文字の中心紬がそろっておらず一文字ずつ書いてある▽両面で同じ文字を繰り返し書いている－などから、これを使って、役人の最低限の素養だった漢文の読み書きの練習をした可能性が高いとしている。

（朝日新聞　１９９９．１．２６　朝刊　第３社会　２５面　１３版　一部加工しました）